

幕末の英国外交官 アーネスト・サトウ

Ernest Satow

横浜歴史研究会 2024年11月3日

平 博子

はじめに

幕末に日本で活躍した外国人を上げると、黒船のペリー、通商条約を締結したハリス、武器商人のグラバー、英国公使のパークスなどが思いつくことだろう。その中でも、日本語を巧みにあやつることができ、伊藤博文や井上馨と交流をして、幕末維新史に多大な影響を与えた英国外交官 アーネスト・サトウに焦点をあてていきたい。

1. 生い立ち 北京派遣

1843年、父ドイツ人のデーヴィッド、母イギリス人マーガレットの3男として、ロンドンで誕生した。経済力があり、教育熱心な両親に育てられ、ユニバーシティ・カレッジに進学した。兄エドワードが図書館から借りたオリファント著「エルギン卿遣日使節録」（1859年）を読み、日本に関心を持つようになった。在学中の1861年、イギリス外務省の中国・日本領事部門通訳生試験に首席で合格し、1862年（文久2年）1月上海に到着した。3月からは北京で日本語学習の準備として、漢字や漢文の学習に専念する。

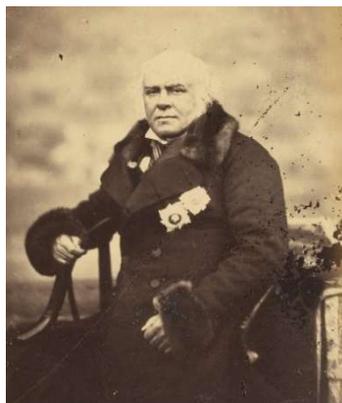
2. 来日

外国人殺傷事件が相つぎ、外交交渉の機会が増大し、日本語を直接英語に翻訳できる通訳官が必要となった。1862年9月サトウは19歳の若さで、北京を出発して日本に到着した。

来日して6日目の9月14日、生麦事件が勃発する。サトウはリチャードソン救出に向かう騎馬自営軍団を見送り、同僚のイギリス公使館付き医官ウィリアム・ウイリスは生麦事件の現場に向かい検死を行った。



来日時のサトウ



エルギン卿



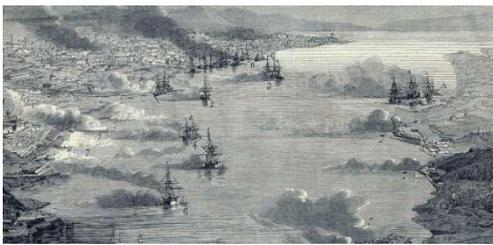
生麦事件の現場

12月 駐日代理公使ニールに同行して、品川御殿山に建設中のイギリス公使館を視察。（1863年に高杉晋作・久坂玄瑞らにより焼き討ちされ全焼）その後、愛宕山、王子、洗足池、浅草など、馬で遠乗り観光をして、日本文化に造詣を深める出発点となる。

3. 薩英戦争と四国艦隊下関砲撃事件

①イギリスは生麦事件の犯人処刑と、賠償金 10 万ドルを薩摩藩に要求したが、薩摩は拒否。1863 年 8 月ニール公使以下 8 名の公使館員は 7 隻のイギリス艦隊に搭乗し、薩摩へと向かう。交渉は進展せず、イギリスと薩摩は砲撃戦となった。イギリス側は戦闘にならないだろうという予測から、当初は苦戦し、旗艦ユーリアラスのジョスリング艦長ら 13 名が戦死し、思いもよらぬ打撃を受けた。また、イギリスは初めて最新式のアームストロング砲を使用、鹿児島城下を焼き払った。イギリス議会では、民間人（非戦闘員）に被害を与えたとして、議論になった。11 月から横浜のイギリス公使館で和平交渉が開催され、薩英間の交流が深まることとなる。

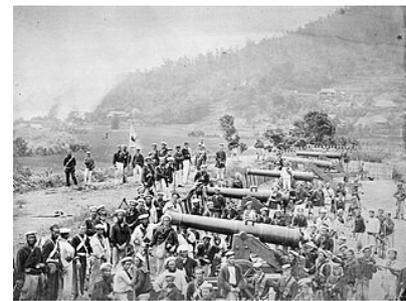
②1864 年 8 月 イギリスのクーパー提督を総司令官とする 4 개국連合艦隊（英・仏・米・蘭）が横浜から下関へ遠征し、9 月から長州藩への砲撃を開始した。サトウはクーパー提督付き通訳として、戦闘に参加した。外国側の圧勝に終わった後、長州藩は「攘夷」から「開国」へと藩論を変更していくこととなる。戦争回避のために、ロンドン留学から急遽帰国した伊藤博文、井上馨が講和談判に通訳として参加し、以後サトウと交流（文通）を開始することになる。



薩英戦争



長州ファイブ
(上段 右 伊藤博文
下段 左 井上馨)



四国艦隊下関砲撃事件

4. 英国策論

①1865 年 4 月 サトウは通訳生から通訳官に昇進した。イギリス公使館に初めて日本語を自在に屈指する外交官が誕生した。サトウの同僚であるアレクサンダー・シーボルトは父シーボルトと共に 13 歳で来日しているが、日本語の読み、書きという点ではサトウのほうが優秀であった。

②西国での情報収集の傍ら、日本の書物の翻訳や日本語辞書の編纂を行った。サトウは「薩道愨之助」、「薩道愛之助」などの名前で日本人の間で知られていた。

③1865 年 7 月 第二代目駐日公使としてハリー・パークスが来日した。11 月には四ヶ国代表による大阪での条約勅許・兵庫開港・関税改訂交渉のため、パークスに同行し兵庫に上陸した。

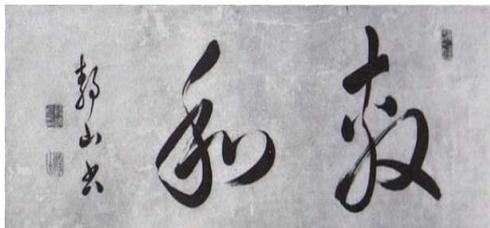
④1866 年 3 月から 5 月にかけて 3 回にわたり、横浜で発行されていた週刊新聞「ジャパン・タイムズ」に無題・無署名の論説を発表した。サトウの日本語教師である徳島藩士沼田虎三郎のサポートを受けて翻訳し、藩主 峰須賀齊裕の閲覧のために提供した。この写本が「英国策論」として広範囲に流布した。1867 年以降、印刷されたものが大阪や京都の書店で販売されるに至った。朝廷・諸藩・幕府などすべての勢力に流布され、「近

衛家書類「中山忠能履歴史料」に写本が収録されている。1866年12月サトウが宇和島を訪問した際には、藩主伊達宗城がすでに読んでいることを直接サトウに話している。

⑤「英国策論」の内容

「英国策論」のなかで、将軍は日本を代表しておらず、将軍とのみの条約を維持することはできないとする。諸侯は将軍の命令を聞かず、貿易の利益にもあずかっていないと認識し、外国は一諸侯（将軍）ではなく、他の同等諸侯と条約を結び直すべきであるとした。生麦事件によって、将軍は諸侯を統制できないことが明白となり、諸侯が割拠を始めた契機であると指摘し、外国は今の通商条約を破棄し、新条約を結ぶべきであると結論づけている。

⑥サトウ個人の非公式な見解が、イギリスの対日政策を代弁するものと受け取られていることは重要である。サトウはパークスが「英国策論」の存在を知らなかったと後に回顧しているが、イギリスの外交官制度は確固として確立されたものであり、上司のパークスが知らなかったとは考えにくい。



サトウの書



パークス



英国策論

5. 江戸幕府の終焉

①1867年 徳川慶喜が大政を奉還した。サトウは内戦が不可避であり、「終わりの始まりが開始された」と予測している。1868年1月3日朝廷は王政復古の大号令を発し、慶喜の辞官納地を決定し、サトウは大阪城へ移動する慶喜と遭遇している。

27日、鳥羽伏見で戊辰戦争が勃発し、パークスらは兵庫へ脱出した。2月、新政府軍兵士を治療するウィルスに同行して、初めて京都を訪問した。

神戸事件（岡山藩兵と英仏軍が衝突）、堺事件（フランス軍艦水兵と土佐藩兵が衝突）に続き、3月天皇謁見に参内するパークス一行が襲撃された。新政権はすみやかに、イギリスとの友好関係を軸に解決した。

江戸無血開城

西郷の江戸総攻撃から無血開城への方針転換にパークスの圧力があつたのか？

徳川慶喜は恭順の意を表して上野寛永寺に蟄居した。東征軍は東海、東山、北陸道から江戸総攻撃を準備して江戸にせまった。4月1日から一週間、サトウは情報探索のため江戸へ派遣されたが、日記がこの間空白のため、さまざまな解釈がある。

パークスが「慶喜はすでに恭順しているのに、それを攻撃すること、まして命をとるようなことは国際世論が許さない、江戸総攻撃は止めるべきである」と西郷に圧力をかけ

たとする説である。

(A) サトウ・ルート 勝・西郷の江戸会談の前にサトウが勝に会い、西郷に圧力をかけたたとする説

『一外交官の見た明治維新』（サトウ著）「わたしの主な情報源は、かつて徳川海軍の総指揮官であった勝安房守であった。わたしは一目を避けるために、ふつつ暗くなってから勝を訪ねた」

荻原延壽『遠い崖7』によると「これは、そのあともう一度横浜から江戸に出てきてからのことであろう。実情は江戸に入った当初、いったい誰が東征軍の矢面に立つ徳川側の最高責任者であるのか、サトウにもただちに察しがつきかねたのではないか」

『一外交官の見た明治維新』は1921年にサトウが54年前のことを思い出しながら書いた回顧録であり、当時の日記は空白である。サトウが勝・西郷会談の前に勝に会い、パークスの発言を伝えた確実な史料はない。

(B)木梨・渡辺ルート 木梨精一郎・渡辺清（東海道軍参謀）がイギリス公使館を訪れ、江戸城総攻撃の際の負傷兵のために病院の世話を依頼したが、その際にパークスから江戸城攻撃はやめるべきであると告げられ、それが西郷に伝わったたとする説。

西郷にとって、勝との会談時にこれが「圧力」となったかは、推測の域を出ない。味方の強硬派（東山道軍参謀 板垣退助）を説得する材料に「利用」したのではないか。また、木梨らがパークスのところにやってきたのは偶然であり、パークスの意思によるものではない。



江戸開城談判 結城素明画



板垣退助



上野戦争

② 5月3日 江戸城が無血開城した。7月4日上野戦争で旧幕臣（彰義隊）が敗北した。パークスは大阪へ向かい、5月22日外国政府代表として、大阪東本願寺で新政権承認への最初の信任状を天皇に提出した。

③ 6月奥羽越列藩同盟が成立し、戊辰戦争は北越から東北へと移っていき、11月会津藩が降伏した。11月東京にはいる天皇を接遇所前で見物したサトウは、「群衆が静まり返った」と感動を日記に記している。1869年（明治2）1月1日東京が開市、5日にイギリス外交団は江戸城で天皇に謁見した。1868年12月旧幕府軍の榎本艦隊は箱館を制圧し、交戦団体であると声明を発表し、諸外国に局外中立を要請した。しかし1869年6月新政府軍の攻撃により降伏した。

6. 明治時代のサトウ

①1869年2月、サトウは賜暇（有給休暇）が与えられ、一年の帰国が認められた。サトウの功績に対し、岩倉具視から蒔絵の用筆筒、島津忠義から孔雀形の銀の舟の置物、勝海舟から脇差、明治天皇から大きな蒔絵の用筆筒などが贈られ、盛大な送別宴が開かれた。後年サトウは「1862年からの7年間は人生で最も充実した時間」「本当に生きていた」と回想している。

②1870年11月、1年8ヶ月ぶりに日本に帰任した。その後外国人として初めて伊勢神宮に参拝するなど、日本各地を旅行した。日本に関する言語・考古学・歴史・民俗・地理・宗教に関する論文や旅行案内など、数多くの著作を執筆して、「日本アジア協会」で発表され、日本研究の第一人者となった。また各地を旅行して「中部・北部日本旅行案内」という本格的なガイドブックを出版した。サトウは健脚で、八ヶ岳、南アルプス、富士山などにも登った。

③1877年二度目の賜暇で帰国した。その帰任の途中、西南戦争直前の鹿児島に行き、西郷隆盛と再会した。しかし西郷は無口で「会話はとるにたらないもの」に終わり、これが西郷との最後の別れとなった。

7. 日本の家族

①1871年（明治4）頃、サトウは武田兼と結婚し、2男1女をもうけた。長女は生後1年5か月で病没。長男栄太郎（1880～1926）は成人後アメリカで生活していたが、46歳アメリカで死去した。次男久吉（1883～1972）は東京外語学校を卒業後、ロンドンの帝国理科大学、バーミンガム大学に留学し、帰国後北海道帝国大学などで講師を務め、すぐれた植物学者となった。また、1905年日本山岳会を創設した7人のメンバーの一人でもある。

②サトウは兼や子供たちのために、千代田区の富士見町に家を購入した。（現在の法政大学80年館がある場所、1976年まで武田家の住居）その後赴任先のバンコク、モンテヴィデオ、タンジュール、北京、隠栖したオタリー・セント・メリーから、兼を気遣う日本文の手紙と生活費を送り続け、子供たちとは英文の手紙のやりとりをサトウが亡くなるまで続けている。



武田 兼



久吉・ルーシー・栄太郎



富士見町の武田家

8. その後の任地

①1882年（明治15）20年間住んだ日本を離れ、3度目の賜暇帰国をした。1884年バンコク（シャム）駐在の総領事に任命された。1885年には公使に任命されて、外交部門に移った。

1889年（明治22）モンテヴィデオ（ウルグアイ）、1893年（明治26）にタンジール（モロッコ）の公使を経て、1895年（明治28）日英関係強化のため日本公使に任命され、12年ぶりに日本に赴任した。

②極東情勢の急転により、1900年（明治33）駐清公使に任命され、義和団事件の事後処理を行った。1906年（明治39）清国での任務を終え、日本経由で帰国し、45年に及ぶ外交官生活から引退した。帰国後はオタリー・セント・メリー（ロンドンより西南240キロ）にて隠栖し、1929年（昭和4）8月86歳で逝去した。

サトウの人物批評

「徳川慶喜」将軍は自分がかつてみた日本人の中で最も貴族的な風貌の一人である。秀麗な顔だちを持ち、額は高く、鼻筋はよくとおり、実に好紳士であった。

「西郷隆盛」黒ダイヤのように光る大きな目をしていて、しゃべる時の微笑みには何とも言えぬ親しみが感じられた。ただとても賢い人物だが、なかなか心を開いてくれないので、少々厄介だ。

「小松帯刀」私の知っている日本人の中で一番魅力のある人物で、家老の家柄だが、そういう階級の人間に似合わず政治的な才能があり、態度にすぐれ、それに友情に厚く、そんな点で人々に傑出していた。顔の色も普通よりきれいだったが、口の大きいのが美貌をそこなっていた。

「木戸孝允」非常に穏やかで丁寧な物腰の人物。政情について議論すると、すごく熱く語る。

主な参考文献

- 荻原延壽『遠い崖 —アーネスト・サトウ日記抄』朝日新聞社 1999年
横浜開港資料館 編 『図説・アーネスト・サトウ』有隣堂 2001年
町田明弘 『明治維新 幕末人物伝 アーネスト・サトウ』NHKカルチャー 2019年
B.M.アレン『アーネスト・サトウ伝』東洋文庫 平凡社 1999年
森田健司 『墨夷応接録・英国策論』作品社 2023年
山岡鉄舟研究会 『英国公文書などで読み解く江戸無血開城の新事実』2016年
岩下哲典 『江戸無血開城』吉川弘文館 2018年